

病院激戦区で 異彩を放つ

岡山県倉敷市を中心とした県南西部医療圏の人口は約70万人で、国内有数の病院激戦区。倉敷市白楽町にある倉敷成人病センターは市内に急性期病院がひしめく中、患者視点の思想と独自の経営理念を掲げて発展、地域と患者に支持され、52年の歴史を刻んできた。

「日本夜景遺産」に選ばれた、白壁の美しい町並みが続く倉敷美観地区。気分転換に訪れることを楽しみに来院する方も多いという。



全国でもトップレベルの診療科を設置



倉敷成人病センター 理事長
ロボット先端手術センター センター長
婦人科主任部長

安藤 正明 あんどう まさあき

自治医科大学卒業。日本産科婦人科学会専門医・指導医、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医、日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医・指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医（産科婦人科）、日本婦人科ロボット手術学会認定プロクター、日本ロボット外科学会国際A級ライセンス

地域と患者の信頼を得て大きく発展



倉敷成人病センター 副院長
アイセンター センター長

岡野内 俊雄 おかのうち としお

岡山大学医学部卒業。日本眼科学会専門医・指導医。眼科PDT認定医。岡山大学医学部医学科臨床教授。

腹腔鏡下手術、腔式手術など 患者さんにやさしい医療を提供

倉敷成人病センターがとった戦略は卓越した技術を持った医師集団を核として全国でもトップレベルの診療科を生み出し、また施設にも独自性を持たせ、病室は全室個室（特別室3室を除く266床すべてが部屋代なし）でプライバシーにも配慮したこと。それによって認知度が上がり、競合医療機関との差別化を図ることができた。その看板のひとつが婦人科だ。

「一貫して患者さんにやさしい低侵襲な治療にこだわってきました」と倉敷成人病センター理事長であり、ロボット先端手術センター長を兼任する安藤正明医師は話す。

安藤医師は1986年の着

任。当時の婦人科手術は、帝王切開が年間50件程度、通常の婦人科手術も週に1件程度しか行われていなかった。

ただ、開腹手術は患者さんの負担が大きいため、腔式手術の導入を進めていた。腔式手術は、おなかを切らず、腔から子宮などを摘出するもの。傷がなく、痛みも少なく回復が早いことから、好評を持って迎えられ、手術件数は増加していった。

腔式手術の経験を積んでいくうちに、腹腔鏡下手術が、がん手術に適用できる可能性に気づき、1997年、腹腔鏡下手術を導入した。切開創が小さく、体への負担、術後の合併症も少ない。

「当時、国内では婦人科悪性腫瘍の腹腔鏡下手術は、ほとんど行われておらず、学会でも大き

な注目を浴びました。見学に来る先生も多く、徐々に同手術に対する認知が高まり、広く定着しました。婦人科領域における腹腔鏡下手術の「先導役」を務めたと自負しています（安藤医師）

ロボット支援下手術も いちはやく導入

当初はロボットに対する

懐疑的な意見もあったが、2013年、内視鏡手術支援ロボット「ダビンチ」を導入。ロボット支援下手術をスタートし、実施したところ良好な結果が得られた。

婦人科領域におけるロボット支援下手術件数は急速に増加し、累計が2390件に達した

（2023年10月現在）。

2022年度*のロボット支援下手術件数は518件（ロボット支援下手術を含む腹腔鏡下手術は1538件）で、国内最多。

良性疾患の手術は患者さんが少しでも早く日常生活に戻れるよう、99%以上を低侵襲手術（ロボット支援下手術、腹腔鏡下手術、腔式手術）で行っている。また、妊娠を望む子宮頸がんの患者に対する腹腔鏡下広汎性子宮頸部切除術、直腸・膀胱・尿管に及んだ重症子宮内膜症に対する腹腔鏡下手術など難易度の高い手術も手がけており、全国から患者さんが訪れる。

「多くの女性が抱える月経困難症や子宮内膜症などの良性疾患から子宮がん、卵巣がんなどの悪性疾患まで、女性特

含む疾患、硝子体混濁、硝子体出血など）が852件と突出した実績を誇る。

アイセンターには常勤・非常勤合わせて15名の医師（日本眼科学会専門医12名）が在籍している（2023年10月現在）。

特色のひとつは高度で先進的な医療の目配りを欠かさないうことだ。たとえば緑内障手術は線維柱帯切開術、線維柱帯切除術、低侵襲緑内障手術（MIGS）に加え、チューブシャント手術も採用。既存療法では奏功しない難治性緑内障に対してのみならず、視機能やQOLを維持しやすい特徴を生かして患者さんの多様なニーズに応えている。

眼科の内眼手術は手術用顕微鏡下で行われてきた。現在では、さらに進歩、4Kモニターに描出した3D映像で

手術する@Heads-up surgery（HUS）が発展しつつある。2020年8月、同センターでもHUSを導入、カールツァイス社製デジタル顕微鏡を新たに設置した。

「これにより手術時の照明光量が軽減でき、網膜への光障害のリスクが低減されます。ただ、映像の精細さは顕微鏡に劣りました。当院で行っている低侵襲網膜硝子体手術（MIVS）や白内障手術を徹底するには不十分でした。本来の性能を生かすべく、外付けのカメラコントロールユニット（CCU）を独自に設置し、一年以上かけ設定を煮詰めることで高精細な映像の描出が可能になった。顕微鏡下の解像度を保ち顕微鏡を超えた被写界深度を持ち合わせた今後のHUSの発展に繋がると考えます」（岡野内医師）

患者の身体的、精神的な負担を軽減 導線にも配慮

アイセンターの取り組みで特徴的なのは、治療を必要とする患者さんのストレス軽減に徹底的にこだわったこと。人的環境として、視能訓練士や看護師他、すべての職員を眼科専従としてプロ意識を育むことにより、患者さんと共に病気を治そうという体制とした。また物的環境では治療に際し、心身のリラクゼーションを維持できる空間整備、つくりを尽力。ストレスを可能な限り和らげられるように工夫した外来と専用病棟、手術前後に家族も同伴できる周術期ラウンジ、好きな音楽を聴きながら手術を受けられる手術室などの環境も整備した。さらに高齢の患者さんに配慮し、それらを新棟2、4階に集約させて導線にも配慮。



高精度4K3Dモニター手術顕微鏡システム（HUS）による低侵襲手術



倉敷成人病センターの外観、左側が新棟

有の悩みや痛みに向き合い、患者さんのライフスタイルに応じた最適な治療を提案しています。他院では開腹手術が必要といわれた症例でも低侵襲手術で行うことが多いです。婦人科手術では、できるだけ

傷を小さく、手術時間を短くすることで早期の回復につなげ、なるべく早く普段通りの生活を送れるようにすることが大切です」（安藤医師）

婦人科には常勤医師が12名在籍。日本産科婦人科学会の専門医・指導医が7名、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医6名、日本ロボット外科学会認定専門医7名が在籍している（2023年10月現在）。

中でも安藤医師の手術実績は群を抜く。日本ロボット外科学会は4段階の認定証を発行しているが、婦人科領域で国際A級ライセンスの認定を日本で受けているのは安藤医師のみだ。

2021年2月、ダビンチXi2台体制としたロボット先端手術センターを開設。2023年5月には最新の



最新の手術支援ロボット「ダビンチSP」を西日本および民間病院で初めて導入

「ダビンチSP」も導入、SPでの手術件数は国内トップの130件に達した（2023年10月現在）。単孔式専用のロボットで、切開創が1カ所なので、さらなる負担軽減や整容性の向上が期待できる。

網膜硝子体手術は年間852件と突出した実績

アイセンター（眼科）も看板のひとつ。2021年2月、同センターの新棟増築に伴い、「自らが患者となったとき、

どういう環境のもとで治療を受けたか」（岡野内医師）を真摯に見つめ直し、眼科のすべての機能を集約、アイセンターを開設した。

「眼底疾患、緑内障、水晶体関連疾患に対して、高い技術を提供する最終病院、最後の砦として機能しています。地域の医療機関からの紹介も多い。もちろん、角膜疾患や斜視など幅広く疾患に対応しており、生活に支障をきたす視機能の方には生活支援の方法・道具をアドバイスするロビージョン外来も開設しています」

と副院長兼アイセンター長の岡野内俊雄医師は話す。

2022年度*の手術件数は白内障手術が3205件、緑内障手術が376件、網膜硝子体手術（網膜付着組織を

「眼科手術はほとんどが眼のみの局所麻酔で施行されます。それゆえに患者さんの不安や恐怖も大きい。だからこそ、周術期のストレス軽減は大切なことです。患者さんの情報は職員にシームレスで共有されています。このことは、さまざまな局面で患者さんの安心感に繋がるはず。患者さんの見えるところ、見えないところで、常に職員が寄り添っています。是非とも頼りにしてください」と岡野内医師は呼びかける。